

福岡大学 医学会ニュース

No. 42

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

第44回福岡大学医学会例会【報告】

日時 平成13年3月28日(水)
17時10分から
場所 福岡大学医学部臨床大講堂

【司会】庶務幹事 畠 博(衛生学教授)

1. 開会の辞
2. 会長挨拶 医学部長 池原 征夫
3. 福岡大学医学紀要第27巻優秀論文賞授与式
[進行] 編集幹事 黒木 政秀(生化学第一教授)
受賞者: 小林 久美氏
論文名: Comparative Genomic Hybridization (CGH)法を用いた平滑筋系腫瘍の解析
4. 講演
比嘉 和夫氏(麻酔科学教授)
「水痘・带状疱疹ウイルスによる先天性奇形の機序—仮説—」
小林 久美氏
受賞論文の要旨講演
5. 閉会の辞

福岡大学に於ける 医学部・病院の発展を目指して

副学長
病理学第一教授
菊池 昌弘

福岡大学は今年四月で、創立六十七年を迎えました。医学部は二十九年目、病院は二十七年と八ヶ月目になります。文系学科から理系学科そして最後に医学部と発展してきた大学のなかであって、その大学での位置づけに特異さがみられるのはやむを得ないところがあるのはいまやめなところでは、特に福岡大学では、学部を考える際に、医学を除く学部と医学部・病院として扱われるのが常となり、皆さん特別に疑問を投げかけないことをみてよくわかります。医学部・病院が出来たために大学

経営に窮りを来すのではないかと危惧されたために、別に示すようになったとも聞いています。このように医学部・病院の開設は、歴史的に見て全学の総意であつたとは言えない点があるようにあり、そのことが、今日なお、医学部・病院を含む総合的な縛まりに陰を落としていられるかもしれません。それはさて置き、医学部・病院も大学の一翼を担う大きな部門として存在していることは明らかです。このような背景を持ちながら今日に及んでいる医学部・病院を、今後どのように持っていくかは、大きな課題と言えます。そして医学部は、如何に時代の要請に適した医師を養成することが出来るのか、病院は、地域医療に充分に適応し、最新の医療を実現させるという目標を、どの様に達成するかという理念を根底として、福岡大学としての特異性を作り上げなければなりません。

ここ数年、医学部卒業生の国試合格者の低下が目につくようになり、その対応が焦眉の急として、対策が検討されています。入学時には、優秀な成績を示していた入学者がなぜ、このような問題を起こすのかを明らかにする必要があります。国試の内容が変化しただけとも言われていますが、他の大学では、著しい合格率の低下は見られていないことから、そうとも言えないようです。入学時には、優秀な成績を示していた学生が、なぜこのような結果としてあらわれるのか、入学後の教育なのか、環境なのか、それともなにか他の要因が想定されるのか、教員それぞれが、その原因を明らかにするために心を砕いていますが、少なくとも教育方法については、カリキュラムの変更による、六年次の教育の充実と講義内容の検討、国試と学内試験のずれの解消が計られているので、その成果は近く明らかになるものと思われ

ます。学生だけでなく教員についても、当然問題を明らかにすべきでしょう。特に医学部教員の最大の目的はあくまでも学生教育にあることを、自問自答しなければならぬところでは、教員の評価として、教育評価は常に不透明であり、学問的成果に対しての評価の陰に隠れて明らかにされにくいところがあり

「第3回福岡大学医学賞」 論文募集

- 1 賞の目的
福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動を促進することを目的とする。
- 2 対象
対象とする論文は、福岡大学医学部、病院および筑紫病院の研究活動にて作成され、平成12年1月から平成12年12月に発表されたものとする。
論文の筆頭著者は本学会会員で、論文発表時に年齢が40歳未満の者とする。
- 3 応募方法
医学部、病院および筑紫病院各部門で2編以内(別刷各3部を添付)を目安としてとりまとめ提出する。
- 4 応募締切 平成13年6月15日(金)
- 5 提出先 福岡大学医学会担当 大山
[福岡大学医学部内 ☎801-1011 内線3023]
- 6 選考方法
1) 応募された論文別刷を医学会評議員に回覧して、7月に開催予定の評議員会において3編を選出する。
2) 選出された3編の論文の著者は、10月3日(水)開催予定の福岡大学医学会例会の席で各15分間の講演を行う。
3) 各講演を聴取した後に、評議員および聴衆が投票を行う。
ただし、評議員の1票は聴衆の5票に該当する。
4) 投票の結果により、後日、金賞1名、銀賞2名を決定し、医学部長が医学部長室において受賞者の表彰を行う。
5) 審査の結果は、福岡大学医学会ニュースにて公示する。
- 7 副賞
金賞は10万円、銀賞は5万円とする。



『福岡大学医学紀要第27巻優秀論文賞』受賞者 小林久美氏(右から2人目)を囲んで

ます。この問題は常に問題とされその対策が討議されていますが、その具体的な方策を立てることが望まれます。学生の能力の向上や発揮を計数化できれば、教員の教育への寄与が何らかの形で、具体的になるといえるのが、この問題の常にある問題とされています。この問題は常に問題とされその対策が討議されていますが、その具体的な方策を立てることが望まれます。学生の能力の向上や発揮を計数化できれば、教員の教育への寄与が何らかの形で、具体的になるといえるのが、この問題の常にある問題とされています。

全ての問題解決の第一歩であることは言うまでもありません。病院としては福岡大学病院と筑紫病院が二つの車輪となっており、両病院とも、多くの構造上の不備に関わらず、黒字基調となり、これまでの病院荷物論に対して胸を張って答えられるようになったと言えます。しかしながらそれぞれの病院は福大病院は開院から二十八年、筑紫病院は開院から十六年、(建物が出来てから二十年以上)になり、建物の老朽化とともに、設備についても、時代に対応出来なくなっています。特に筑紫病院にあっては、倒産した民間病院を買収した建物を利用してあるために、その老朽化は著しいものがあります。両院をどのように、これからの医療に適した施設として改めようかは、特に差し迫った問題です。福大病院は、地下鉄開通が五年後となり、可能なならば、それに間に合うよう設備を整うように出来ることを目指して、環境づくりを計る必要があります。幸い大学のキャンパス将来計画の答申が提出されており、これからは具体的な計画実現の道筋が整えられて行けば良いという所に来て

います。筑紫病院については、大学としてその存在の必要性が論じられていた時期もありましたが、地域医療中核機関としての存在、医学教育施設としての必要性から、その充実の方向が明らかになったところです。筑紫病院の極めて優れた立地条件は、病院としての発展性に問題の無いところであり、如何にその施設を充実するかが今後の課題とされることです。老朽化した建物の改築は、現在の位置では困難であること、改築には新築よりも費用がかさむこと、改築中の病院機能の維持などから見て、同じ医療圏での移転も考えて、早急な準備が望まれるので、全学的な将来計画案の一つとして福大病院とともに準備が計られています。

医学部・病院に於いては以上のように種々の問題を抱えているわけですが、何れにせよこれらの解消は、福岡大学の将来を見据えた、長期計画の一つであります。福岡大学は運命共同体として存在すると言われ続けて来たことの具現化をするために、大学全体が、一つとなつて力を入れなければならないと、努力しているところです。

新 風

平成12年10月1日付で昇格された方に自己紹介をしていただきました。

内科第三講師

早田 哲郎



昭和六十三年に福岡大学医学部を卒業後、当時、奥村教授が主宰されていた第一内科に入局し、二年間の研修の後、消化器系の大学院に入学しました。大学院では清水講師（現在、南区で開業）の指導のもと、アルコール代謝酵素の一つであるCytochrome P450 2E1とアルコール性肝障害との関連についての研究を行い、平成六年に学位を頂きました。この研究を通して実験病理について興味を持つようになり、機会を頂いて平成七年八月より半年間、ニュージーランドのオタゴ大学医学部病理学教室に留学させて頂きました。

した。ここでは肝臓におけるインスリン様成長因子2 (IGF2) の発現状態を *in situ hybridization* を用いて調べていたが、基本的な分子生物学的な手技など、短い間に多くのことを学ぶことができた、お世話になった先生方にとても感謝しています。昨年の内科再編により、内科消化器部門は第三内科として向坂教授を中心に再スタートを切りましたが、教室のいい雰囲気の中、臨床、研究、学生教育を楽しくやっています。学生の頃からやっているウインドサーフィンをバンド活動は今も現役です。さらに四年前からはスノーボードも始めました。良く学び、良く遊びがモットーで、あまりに充実しすぎる毎日のため、婚期を逃したと言われていますが、更にテンションを上げて頑張ります。どうかよろしくお願いします。



第27回医学部慰霊祭

第二十七回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、御遺族並びに御来賓の方々、本学教職員と学生約五百名が参列し、平成十二年十月二十一日(土)午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。



今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、正常解剖のために献体された三十八柱、病院で死去されて病因究明のために解剖を御承諾頂いた八十柱、合わせて百十八柱でした。献灯献花の後、厳肅な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、池原征夫医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖に献体頂いた霊位とそご遺族、さらに、ご協力頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに「私どもは、日々花を供え、香をたいて百十八柱の科学に對する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表しています。本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御意志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します」と新たな誓いを披露されました。

ケンブリッジより

産婦人科学講師 江本 精

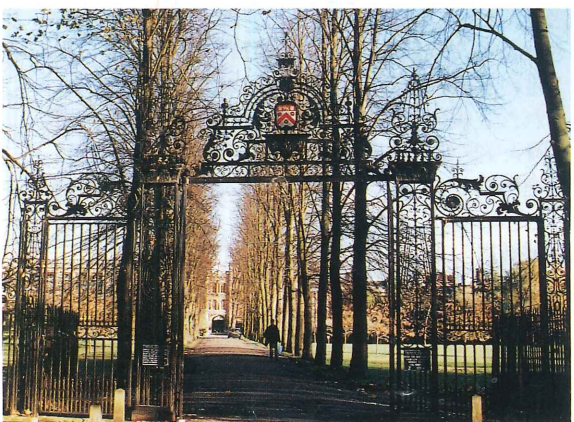


ケンブリッジ大学 病理学教室の前にて

海外だより

り、ヨーロッパで最も進んだハイテクタウンの様相を呈しています。私の研究室の隣にはロース・ロイス社との共同研究所があります。大学の教育病院には製薬会社との共同臨床研究室が当たり前のよう設置されています。日本も産学一体となった共同プロジェクトを本腰を入れて推進する必要性を感じています。反面、研究費の使用に関しては大学が一括管理している点が堅苦しく、私自身も自分の研究費の獲得に日夜努力しております。イギリスでは、外国人の研究者に対しては施設使用料を請求してよいことが法制化されており、質実剛健な英人人気質に基づく経済面、アメリカは、アメリカの一般的なカレッジ、カレッジ、カレッジなどを見かけることができます。来年には、研究実績だけではない涙と笑いの留学みやげを日本に持ち帰りたいと思っております。最後に、此の様な在外研究の機会を与えていただいた福岡大学及び大学医学部に感謝いたします。

イギリスの歴史ある大学の町、ケンブリッジに家族と共に滞在して約一ヶ月が過ぎました。ケンブリッジはイギリスの南東部に位置し、ロンドンから鉄道で約一時間半の距離にあり、自転車で往復四十分で行き来しています。研究者は総勢約三〇人で国際色も非常に豊かですが、産婦人科学教室としては私が最初の日本人研究員となりました。研究室では、近年注目されている血管新生(Angiogenesis)の遺伝子と着床や胎盤、子宮内膜症および婦人科癌との関連を主な研究テーマとしています。大学の中に入って驚くのは、築一〇〇年以上の古びたレンガ作りの建物の中に、コンピュータのネットワークが充実していることです。どの建物にもコンピュータオフィスがあり、個人のパソコンの設定も気軽に相談に乗ってくれます。今頃、どこかの国でIT革命と叫んでいるのがここでは空しく感じられます。また、講義の横断性・疎通性が良く、あらゆる講義を自由に聞くことが出来ます。能力さえあれば大学院生でもセミナーを開くことも可能です。また、ケンブリッジはベンチャー産業との提携が急速に進んでおり、ヨーロッパで最も進んだハイテクタウンの様相を呈しています。私の研究室の隣にはロース・ロイス社との共同研究所があります。大学の教育病院には製薬会社との共同臨床研究室が当たり前のよう設置されています。日本も産学一体となった共同プロジェクトを本腰を入れて推進する必要性を感じています。反面、研究費の使用に関しては大学が一括管理している点が堅苦しく、私自身も自分の研究費の獲得に日夜努力しております。イギリスでは、外国人の研究者に対しては施設使用料を請求してよいことが法制化されており、質実剛健な英人人気質に基づく経済面、アメリカは、アメリカの一般的なカレッジ、カレッジ、カレッジなどを見かけることができます。来年には、研究実績だけではない涙と笑いの留学みやげを日本に持ち帰りたいと思っております。最後に、此の様な在外研究の機会を与えていただいた福岡大学及び大学医学部に感謝いたします。



ケンブリッジ大学 キングス・カレッジ

教室紹介

眼科学教室

眼科学教室は昭和四十七年四月に、増田義哉初代主任教授、大島健司助教授(現主任教授)を中心として開設されました。昭和五十三年、増田教授退任に伴い大島先生が第二主任教授に就任され、また平成十一年、林 英之助教授が主任教授に就任され現在に至っています。

現在、在籍者は五十六名(福岡大学病院に大学院生四名を含む二十名、筑紫病院に七名、十三施設の関連病院に二十七名、留学二名、同門会員七十二名となっています。

当科の特徴は、大島教授の専門分野である網膜硝子体疾患の手術治療であり、日本で最も早くから硝子体手術を導入し、増殖糖尿病網膜症や増殖性硝子体網膜症、未熟児網膜症などの治療法の発展に大きく貢献してきました。このため、全国の大学病院などからも重症網膜硝子体疾患の手術依頼を数多く受けています。

また、未熟児網膜症の手術治療に関しては、世界一の症例数で国際的に高い評価を得ており、ロシアや中国など海外からの紹介患者も多数受け入

られています。治療に際しては、医局員全員による手術カンファレンスにて十分なディスカッションを行い、綿密に治療方針、具体的な手術方法を決定してチーム医療を行っています。現在、年間の手術件数は八〇〇例を超えており、うち硝子体手術が約四五〇例、網膜剥離手術が約八〇例、白内障手術が約一五〇例、緑内障手術が約三〇例となっています。これらの多くの症例を扱うことから、臨床研究の材料には事欠くことがなく、大島教授のもと、林教授、加藤

講師、大里講師、松井併任講師らが中心になって多岐にわたる臨床研究を行っています。基礎研究面では林教授、尾崎講師を中心に「眼内血管新生」

を主なテーマとして、ジョン・スホプキンス大学やマイアミ大学、ハーバード大学などの海外留学先を持ち、すばらしい研究成果を納めています。教育面では卒業教育として、眼科学一般の基礎知識の習得、眼科疾患の診察技術および治療方針の考え方を徹底的に学ばせ、一年次には斜視、二年次には白内障手術の執刀が始まり、五、六年次から網膜剥離や硝子体手術のトレーニングを行っています。

学会活動としては、大島教授が日本眼科学会評議員、日本小児眼科学会理事長として

眼科学会の頂点で活躍されており、主催学会としては、日本小児眼科学会総会(昭和五十八年)をはじめとして、九州眼科学会(昭和五十九年、平成六年)、日本網膜剥離学会(平成四年)、日本眼科手術学会(平成六年)、国際網膜疾患フォーラム(平成四年)など多くの国内国際学会を主催しており、今年も第四〇回日本白内障学会、第十六回日本眼内レンズ屈折手術学会を主催し、さらに平成十五年には、第一〇七回日本眼科学会総会会長に大島教授が決定し、医局総力を挙げて準備している状態です。

以上、臨床、教育、研究、学会活動と医局員は多忙な日々を送りつつ、なお一層の発展を目指して努力研鑽を積んでいます。(文責 松井)

